

## 青年期における「個」と「関係性」のアイデンティティ発達と 自己開示との関連

Relationship of the self-disclosure and the development of individuality- and  
relatedness-based identities in adolescence

永 江 誠 司

Seiji NAGAE

(福岡教育大学教育心理学講座)

田 畑 里 那

Rina TABATA

(鹿屋市立田崎小学校)

(平成26年9月30日受理)

本研究の目的は、青年期の個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティの発達が、自己開示とどのような関係をもっているかについて、自己開示の対象との親密度、および性との関わりから明らかにするところにある。親友、顔見知り程度の人、初対面の人の親密度の異なる3者に対する自己開示が測定された。調査対象者は、111人の男子大学生、および139人の女子大学生であった。結果として、アイデンティティの型、親密度、および性の3要因の交互作用が有意であることが示された。個と関係性のアイデンティティがバランスよく成熟した統合群の女性は、男性の統合群、個優位群、関係性優位群、未熟群の4群よりも、また女性の個優位群、関係性優位群、未熟群の3群よりも、それぞれ顔見知り程度の人や初対面の人に対してより多く自己開示をすることが示された。これは、統合群の女性が顔見知り程度の人や初対面の人との間にもより親密な関係を築くことができるということを示唆していると考察された。

キーワード：個としてのアイデンティティ、関係性にもとづくアイデンティティ、自己開示、親密度

### 問題と目的

青年期のアイデンティティ形成と対人関係には密接な関わりがあると考えられ、この時期の対人関係の中心が友人関係にあることから、青年期においてはとくに友人関係のあり方とアイデンティティ形成との間に密接な関係のあることが指摘されている(松下・吉田, 2009)。さらに、友人関係の深まりには自己開示の交換が必要と考えられており、それが親密な対人関係を築いているかどうかの指標になり得ることも指摘されている。

Orlofsky, Marcia, & Lesser (1973) は、同一性地位と友人関係における親密さの関係を検討し、同一性達成群、疎外的達成群、モラトリアム群では、他者と親密な関係を築いている者が多いのに対し、早期完了群や同一性拡散群では多くの友達はいても、真の親密さが欠けた表面的な関係に終始している者が多いことを見出している。このことから、榎本(1991)は自我同一性地位と自己開示性(自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為)の関係について検討している。その結果、同一性達成群はどの相手に対しても自己開示度が高く、同一性拡散群はどの相手に対しても自己開示度が低くなっていること、さらに同性友人に対する自己開示度が最も高いことを示している。また、知的側面、志向的側面、公的側面、あるい

は意見など、積極的に社会に向かっていくような側面の開示度において、同一性達成群のそれらの側面の高さと同一性拡散群の低さがきわだっていること、および情緒的側面や実存的自己など情緒的な側面の自己開示で早期完了群の低さが目立っていることも示している。これらの結果は、自己開示傾向が自我同一性地位により異なることを示している。

アイデンティティは、個としての自己の存在証明であると同時に、他者とのつながりの中での自己、すなわち社会における自己の位置づけによって捉えることが重要である。したがって、アイデンティティの発達を捉えるとき、「個」としての発達の軸と「関係性」にもとづく発達の軸の両面を考えることが必要である。Erikson (1959) も、アイデンティティ形成における他者との関係性が重要であることを強調したが、後のアイデンティティ研究者はこの関係性の側面をしばしば見落としてきたことが指摘されている(岡本, 2002)。

しかし、近年になってアイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉え直すことが試みられている(山田・岡本, 2008a)。当初、「個」と「関係性」の視点は、男性と女性のアイデンティティ発達の差異を説明するものとして捉えられていた。しかし、女性の社会進出など社会の変化を背景に、性の要因のみでアイ

デンティティ発達の差異を説明することに限界が指摘され始め(杉村, 1998), 最近では「個」と「関係性」はアイデンティティを捉える性別によらない視点として認められつつある。

「個」としてのアイデンティティと「関係性」にもとづくアイデンティティは, 次のように定義される。「個」としてのアイデンティティは, Erikson の理論を応用した生涯発達に関する複線モデルの個体化経路に沿って発達し, 自己の能力に対する信頼感を基盤に, 個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴をもつ側面とされる。「関係性」にもとづくアイデンティティは, 同じく複線モデルのアタッチメント経路に沿って発達し, 自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に, 他者と関係を築く能力を獲得し, 他者と相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴をもつ側面とされている(山田・岡本, 2008b)。

山田・岡本(2008b)は, 「個」と「関係性」の視点を含む新たなアイデンティティ尺度を作成し, その尺度を用いてクラスタ分析を行ない, 「関係性」優位群, 統合群, 未熟群, 「個」優位群の4群を抽出している。そして, 「個」の側面は自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れること, 「関係性」の側面は他者は自己とは独立した存在として認識し, 親密な関係を築くことができる傾向として表れることを明らかにしている。また, 統合群は「個」としてのアイデンティティも, 「関係性」に基づくアイデンティティもともに成熟したあり方であると考えられている。

「個」と「関係性」の視点からアイデンティティを捉えていくことは, これまで見落とされがちであった「関係性」の側面を考慮するという点で意義あるものと考えられる。しかし, まだこのような視点からアイデンティティを捉えた研究は少なく, 実証的研究のさらなる積み重ねが必要と考えられる。これらのことから, 本研究では「個」としてのアイデンティティと「関係性」にもとづくアイデンティティという視点からアイデンティティを捉えたときに自己開示度がどのように異なるのか, またそれらが対人関係の親密度および男女によってどのような影響を受けるのかについて検討することを目的とする。

本研究では「個」と「関係性」の弁別性を確認している山田・岡本(2008a)の尺度を用い, 個尺度と関係性尺度によって得られた得点からそれぞれ高群, 低群に分け, それらを組み合わせて4つの群を設定する。すなわち, 個尺度の得点も関係性尺度の得点も高い統合群, 個尺度の得点が高いが関係性尺度の得点は低い「個」優位群, 個尺度の得点は低いが関係性尺度の得点は高い「関係性」優位群, 個尺度の得点も関係性の得点も低い未熟群のそれぞれの自己開示の特徴を検討する。自己開示度は, 統合群で最も高く, 次いで「個」優位群と「関係性」優位群, そして未熟群が最も低く

なると予測される。

また, 自己開示の対象に親密度の違いを設定することによって, 対人関係の特徴がより明確に捉えられると考えられる。三上・山口(2008)は親密度の違いとして, 最も親しい友人と顔見知り程度の友人の2者を設定し, 最も親しい友人に対する方が自己開示抵抗への要因をより多く抱くことを予想したが, そのような知見を得ることはできなかった。その原因として, 開示対象者が友人を得やすい環境にあり, また頻繁に接触できる学生であったため, 親密度のズレが小さかったことをあげている。

そこで本研究では, 親密度を親友, 顔見知り程度の人, 初対面の人の3者として自己開示を検討する。その場合, 統合群の青年は, 「個」の側面と「関係性」の側面の両方が成熟していると考えられるため(山田・岡本, 2008b), 他の群に比べて初対面の人, 顔見知り程度の人, 親友いずれに対しても自己開示度は高くなると考えられる。また, 「個」優位群の青年は幅広い他者との関係を求めるため(山田・岡本, 2008b), 「関係性」優位群や未熟群に比べて, 初対面の人に対しての自己開示度は高いが, 親密な関わりや関係の深まりを拒否することから(山田・岡本, 2008b), 統合群や「関係性」優位群に比べて親友に対する自己開示度は低くなると考えられる。「関係性」優位群の青年は特定の他者との関係を重視するため(岡本, 2002), 統合群や「個」優位群に比べて初対面の人に対する自己開示度は低い, 親友に対する自己開示度は「個」優位群や未熟群に比べて高くなると考えられる。未熟群の青年は, 「個」の側面と「関係性」の側面の両方が未熟なため(山田・岡本, 2008b), 他の群に比べて初対面の人, 顔見知り程度の人, 親友いずれに対しても自己開示度は低くなると考えられる。

さらに, 自己開示に関する研究において, 量的な性差は女子の自己開示度が男子のそれよりも高いという報告もあるが, 先行研究の諸結果は一貫しておらず, 性差を見出せなかったものもある(榎本, 1997)。また, Stokes, Fuehrer, & Childs(1980)は親密度の違いによって自己開示度に男女差があることを見出している。それによると, 初対面の人やちょっとした知り合いに対する自己開示度は女子より男子の方が高いが, 親しい人に対する自己開示度は男子より女子の方が高かった。さらに, 見知らぬ人やちょっとした知り合いに対する自己開示度には性差は見られないが, 親しい人に対する自己開示度は女性の方が高いという報告もある(Chen, 1995; Goodwin, 1995)。これらのことから, 本研究では性を要因の側面から, 男女で自己開示度がどのように異なるかを併せて検討する。

## 方 法

### 調査対象者

大学生 250 名(男性 111 名, 女性 139 名, 平均年齢

Table 1 個尺度の因子分析

	I	II	III	共通性
<b>第1因子「将来展望」</b>				
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている	.89	-.23	.12	.71
将来の職業（専業主婦も含む）について、具体的に考えている	.89	-.27	.10	.69
今後、どんな風に生活していくかを考えている	.63	.16	-.29	.47
人生設計をきちんと立てて、今後の生活を送っていききたいと考えている	.52	.23	-.23	.39
私は、目的を達成しようとがんばっている	.63	.13	-.11	.45
<b>第2因子「自己への信頼感・抗力感」</b>				
私は、自分好きだし、自分に誇りをもっている	.14	.58	.14	.53
私は、多くのことに對して自信を持って取り組むことができる	.19	.45	.31	.55
私は、自分が役に立つ人間であると思う	.07	.71	.01	.56
私は、きつとうまく人生を乗り越えられるであろう	-.30	.87	-.09	.58
自分の考えに従って行動することに自信を持っている	.28	.44	.27	.58
<b>第3因子「自律性」</b>				
私は、自分の判断に自信がない	.01	.21	.67	.61
何かしたあとで、それが正しかったかどうか心配になることが多い	-.19	-.21	.91	.71
私は、決断する力が弱い	-.05	.28	.62	.57
<b>因子間相関</b>				
I		.45	.24	
II			.38	

20.0 歳,  $SD=1.57$ ) を調査対象者とした。

#### 調査時期

調査は、2011 年 1 月に実施した。

#### 質問紙の構成

質問紙は、改訂版個尺度（山田・岡本, 2008a）、改訂版関係性尺度（山田・岡本, 2008a）、および榎本式自己開示質問紙（榎本, 1997）の 3 尺度を用いた。

**改訂版個尺度** 山田・岡本（2008a）の個尺度 15 項目を用いた。この尺度は、「自己への信頼感・効力感」、「将来展望」、「自律性」の 3 因子から構成されている。「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「わりと当てはまる」、「非常に当てはまる」の 4 段階で評定を求めた。

**改訂版関係性尺度** 山田・岡本（2008a）の関係性尺度 13 項目を用いた。この尺度は、「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」、「見捨てられ不安」、「関係の中での自己の定位」の 3 因子から構成されている。「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「わりと当てはまる」、「非常に当てはまる」の 4 段階で評定を求めた。

**榎本式自己開示質問紙** 自我同一性地位群の親密な対人関係のとり方の特徴をとらえることができるということから、榎本式自己開示質問紙を使用した。開示相手として「初対面の人」、「顔見知り程度の人」、「親友」の 3 者を設定し、「非常に話しにくい」、「やや話しにくい」、「どちらともいえない」、「やや話しやすい」、「非常に話しやすい」の 5 段階で評定を求めた。

#### 調査手続き

質問紙調査は集合調査で一斉に回答を求めた。調査目的とプライバシーの保護について説明し、「それぞれの項目を現実の自分と照らし合わせて、一番近いものを回答してください。あまり深く考えこまずに、思ったとおりに答えてください。記入もれがないように、すべての項目に答えてください」と教示を行なった。その後、一斉に回答を求めた。

質問紙は、改訂版個尺度（山田・岡本, 2008a）、改訂版関係性尺度（山田・岡本, 2008a）、榎本式自己開示質問紙（榎本, 1997）の 3 尺度を用いた。

**改訂版個尺度** 山田・岡本（2008a）の個尺度 15 項目を用いた。この尺度は、「自己への信頼感・効力感」、「将来展望」、「自律性」の 3 因子から構成されている。「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「わりと当てはまる」、「非常に当てはまる」の 4 段階で評定を求めた。

**改訂版関係性尺度** 山田・岡本（2008a）の関係性尺度 13 項目を用いた。この尺度は、「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」、「見捨てられ不安」、「関係の中での自己の定位」の 3 因子から構成されている。「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「わりと当てはまる」、「非常に当てはまる」の 4 段階で評定を求めた。

**榎本式自己開示質問紙** 自我同一性地位群の親密な対人関係のとり方の特徴をとらえることができるということから、榎本式自己開示質問紙を使用した。開示相手として「初対面の人」、「顔見知り程度の人」、「親友」の 3 者を設定し、「非常に話しにくい」、「やや話しにくい」、「どちらともいえない」、「やや話しやすい」、「非常に話しやすい」の 5 段階で評定を求めた。



Table 2 関係性尺度の因子分析

	I	II	III	共通性
<b>第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」</b>				
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	.69	-.02	-.15	.48
これまで私が築いてきた人間関係は、私にとって価値のあるものである	.71	-.02	.04	.59
これまでに会った人々によって、今の自分が支えられていると感じる	.76	.03	-.13	.50
私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている	.69	-.05	.12	.34
私がこれまでに関わりをもった人々は、私により影響を与えてくれた	.68	.01	.06	.59
友人関係は、比較的安定していると思う	.54	.04	.20	.62
<b>第2因子「他者との適度な距離感」</b>				
私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある	-.08	.76	.04	.49
私は時々、周囲の人や物事から取り残されて、一人ぼっちであるように感じる	.18	.78	-.13	.40
私は批判に対して敏感で傷つきやすい	-.13	.49	.15	.47
<b>第3因子「関係の中での自己の定位」</b>				
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思います、自分の意見を主張するのにためらいを覚える	.02	.20	.46	.31
他者と一緒に何か物事を行うとき、私はよく受身的になってしまう	-.06	.07	.60	.37
集団内で、私はちゅうちょすることなく、自ら正しいと思うことを表明できる	.12	-.11	.64	.36
因子間相関				
	I	.20	.08	
	II		.47	

「非常に話しやすい」の5段階で評定を求めた。

#### 調査手続き

質問紙調査は集合調査で一斉に回答を求めた。調査目的とプライバシーの保護について説明し、「それぞれの項目を現実の自分と照らし合わせて、一番近いものを回答してください。あまり深く考えこまずに、思ったとおりに答えてください。記入もれがないように、すべての項目に答えてください。」と教示を行なった。その後、一斉に回答を求めた。

### 結 果

#### アイデンティティ尺度の因子分析

**個尺度の因子分析** 個尺度の15項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行なったところ、3因子が抽出された。しかし、「将来展望」因子のうちの1項目、「自律性」因子のうちの2項目の因子負荷量が.40以下であった。そこで、その「自律性」因子のうちの2項目を除外して再度因子分析を行なった結果、3因子が抽出された（Table1）。それらを山田・岡本（2008a）にならって、第1因子「将来展望」（5項目）、第2因子「自己への信頼感・効力感」（5項目）、第3因子「自律性」（3項目）と命名した。また、信頼性分析を行なった結果、十分な信頼性が確認された（ $\alpha=.82$ ）。

**関係性尺度の因子分析** 関係性尺度の13項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行なったところ、3因子が抽出された。しかし、「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」因子のうちの1項目の因子負荷量が.40以下であった。

そこで、その項目を除外して再度因子分析を行なった結果、3因子が抽出された（Table2）。それらを山田・岡本（2008a）にならって、第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（6項目）、第2因子「見捨てられ不安」（3項目）、第3因子「関係の中での自己の定位」（3項目）と命名した。また、信頼性分析を行なった結果、十分な信頼性が確認された（ $\alpha=.76$ ）。

#### アイデンティティの4類型

アイデンティティによって4類型に分けるため、調査対象者それぞれについて個尺度の13項目の平均値、標準偏差を算出した。その後、得点を標準化してZスコアを算出し、Zスコアが0以上のものを個尺度得点高群、0以下のものを個尺度得点低群とした。また、関係性尺度の12項目に関しても平均値、標準偏差を算出した。その後、同じような手続きを行い、個尺度得点高群のうち、関係性尺度のZスコアが0以上のものを個尺度得点も関係性尺度得点も高い統合群、0以下のものを個尺度得点が高いが関係性尺度得点は低い「個」優位群とした。さらに、個尺度得点低群のうち、関係性尺度のZスコアが0以上のものを個尺度得点は低いが関係性尺度得点が高い「関係性」優位群、0以下のものを個尺度得点も関係性尺度得点も低い未熟群とした。

#### アイデンティティと自己開示の関連

条件別の自己開示得点の平均を算出し、アイデンティティ×親密度×性の3要因の分散分析を行なった。

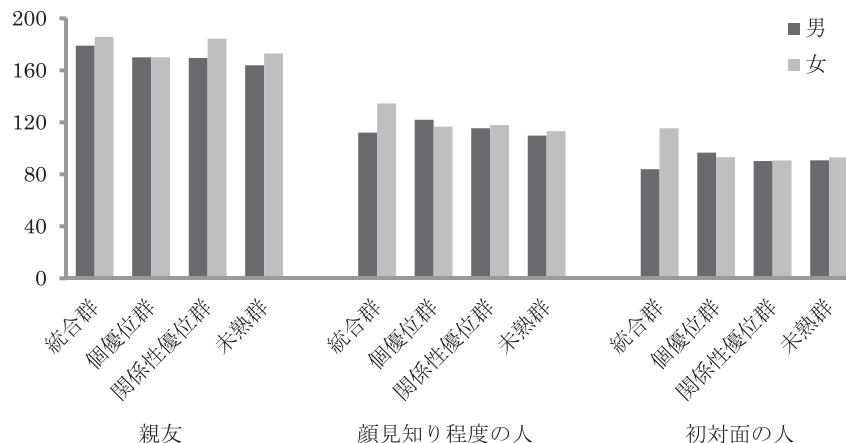


Figure 1 アイデンティティと親密度と性の交互作用

**主効果の結果** アイデンティティにおいて有意差の傾向がみられた ( $F(3,242)=2.61, p<.10$ )。多重比較を行なったところ、統合群と未熟群の間で有意差がみられた ( $t(242)=3.29, p<.05$ )。

また、親密度において有意差がみられた ( $F(2,484)=770.19, p<.05$ )。多重比較を行なったところ、親友と顔見知り程度の人 ( $t(484)=28.82, p<.05$ )、親友と初対面の人 ( $t(484)=40.76, p<.05$ )、顔見知り程度の人と初対面の人 ( $t(484)=11.94, p<.05$ ) それぞれにおいて有意差がみられ、親友、顔見知り程度の人、初対面の人の順に自己開示得点が高かった。

さらに、性においても有意差がみられ ( $F(1,242)=6.05, p<.05$ )、男性よりも女性の方が自己開示得点が高かった。

**交互作用の結果** アイデンティティ×性が有意であった ( $F(3,242)=2.84, p<.05$ )。単純主効果については、女性においてアイデンティティの主効果が有意であった ( $F(3,242)=4.78, p<.05$ )。そこで、多重比較を行なったところ、統合群と未熟群の間 ( $t(242)=4.06, p<.05$ )、統合群と「個性」優位群の間 ( $t(242)=3.21, p<.05$ )、統合群と「関係性」優位群の間 ( $t(242)=2.63, p<.05$ ) で有意差がみられた。また、統合群において性の単純主効果が有意であった ( $F(1,242)=12.48, p<.05$ )。具体的には男性よりも女性の方が、自己開示得点が高かった。アイデンティティ×親密度、及び性×親密度は有意ではなかった。

アイデンティティ×性×親密度が有意であった ( $F(6,484)=2.18, p<.05$ )。この交互作用を示したものが、Figure1である。単純交互作用については、男女ともアイデンティティ×親密度は有意ではなかった。親友を自己開示の対象としたとき、アイデンティティ×性は有意ではなかったが、顔見知り程度の人を自己開示の対象としたとき、アイデンティティ×性で有意な傾向がみられた ( $F(3,726)=2.45, p<.10$ )。さらに、初対面の人を自己開示の対象としたとき、アイデ

ンティティの型×性で有意であった ( $F(3,726)=4.57, p<.05$ )。単純・単純主効果については、親友を対象としたときの女性においてアイデンティティの型の主効果が有意差の傾向を示した ( $F(3,726)=2.25, p<.10$ )。

また、顔見知り程度の人を対象としたときの女性においてアイデンティティの型の主効果が有意であった ( $F(3,726)=3.19, p<.05$ )。多重比較を行なった結果、統合群と未熟群の間で有意差がみられた ( $t(726)=3.51, p<.05$ )。さらに、初対面の人を対象としたときの女性においてアイデンティティの型の主効果が有意であった ( $F(3,726)=4.78, p<.05$ )。多重比較を行なった結果、統合群と「個性」優位群の間 ( $t(726)=2.93, p<.05$ )、統合群と「関係性」優位群の程度の人を対象としたとき性の主効果が有意であった ( $F(1,726)=8.92, p<.05$ )。具体的には、男性よりも女性の方が自己開示得点が高かった。初対面の人を対象としたときも同様に性の主効果が有意であった ( $F(1,726)=17.63, p<.05$ )。しかし、「個性」優位群、「関係性」優位群、未熟群における性×親密度は有意ではなかった。

開示の対象としたとき、アイデンティティ×性で有意であった ( $F(3,726)=4.57, p<.05$ )。単純・単純主効果については、親友を対象としたときの女性においてアイデンティティの主効果が有意傾向であった ( $F(3,726)=2.25, p<.10$ )。

また、顔見知り程度の人を対象としたときの女性においてアイデンティティの主効果が有意であった ( $F(3,726)=3.19, p<.05$ )。多重比較を行なった結果、統合群と未熟群の間で有意差がみられた ( $t(726)=3.51, p<.05$ )。さらに、初対面の人を対象としたときの女性においてアイデンティティの型の主効果が有意であった ( $F(3,726)=4.78, p<.05$ )。

多重比較を行なった結果、統合群と「個性」優位群の間 ( $t(726)=2.93, p<.05$ )、統合群と「関係性」優位群の間 ( $t(726)=3.49, p<.05$ )、統合群と未熟群の間

( $t(726)=3.68, p<.05$ ) で有意差がみられた。

また、統合群における性×親密度が有意であった ( $F(2,484)=4.43, p<.05$ )。顔見知り程度の人を対象としたとき性の主効果が有意であった ( $F(1,726)=8.92, p<.05$ )。具体的には男性より女性の方が、自己開示得点が高かった。初対面の人を対象としたときも同様に性の主効果が有意であった ( $F(1,726)=17.63, p<.05$ )。しかし、「個」優位群、「関係性」優位群、未熟群における性×親密度は有意ではなかった。

### 考 察

アイデンティティの型について、自己開示度に差のある傾向がみられた。自己開示度は、統合群で最も高く、次いで「個」優位群と「関係性」優位群、そして未熟群が最も低くなっていた。統合群と未熟群の間では有意差がみられた。「個」優位群と「関係性」優位群は自己開示得点が同程度であり、統合群と未熟群の中間に位置した。しかし、統合群と「個」優位群、統合群と「関係性」優位群の間では有意差はみられなかった。未熟群と「個」優位群、未熟群と「関係性」優位群の間でも有意差はみられなかった。

これは、アイデンティティの形成が親密な人間関係を築くための前提条件となるという Erikson の説や榎本 (1991) の研究を支持するものである。幅広い他者との関係を求める「個」の側面も、親密な関係を築くことができる「関係性」の側面も、バランスよく成熟した統合群が、未熟群に比べて自己開示を行なっていると考えられる。また、「個」優位群と「関係性」優位群が統合群と未熟群の中間に位置することから、自己開示とアイデンティティの達成レベルに関連性があると考えられる。このことから、「個」優位群も「関係性」優位群も、バランスよく成熟した統合群に比べると自己開示得点が低く、対人関係において未熟な面を有しているということが示された。

山田・岡本 (2007) において、「個」優位群が対人関係上で困難を感じる場面として、集団対個人の間で問題が生じる場面、他者からの具体的でネガティブな働きかけがある場面があげられた。山田・岡本 (2007) は、このことについて、「個」優位群の自他の融合感のなさが、他者の存在を認識した上での成熟したものではなく、他者個人や他者集団に対し、一方的に提示された「個」であると推測されると指摘している。また、「関係性」優位群では、距離感などの他者との関係そのものが対人関係上の困難としてあげている。このことについては、この群に属する対象者が関係のあり方への関心が高いことを示唆し、「関係性」優位群は自他の融合状態にありながら親密な関係を求めている中で、他者との距離感や干渉などの被侵入感に対処しようとしていると考察している。以上のような対人関係上の未熟な面によって、本研究でも統合群に比べると自己開示得点が低くなったと考えられる。

本研究において予測されていた、アイデンティティの型と親密度の交互作用は有意ではなかった。どの群も親密度によって自己開示を行なっており、親友に対して最も自己開示を行ない、初対面の人に対して最も自己開示をしないということが明らかになった。つまり、どの群も3者に対する自己開示の仕方は似ており、親友に対してはよく自己開示を行ない、顔見知り程度の人に対しては中程度、初対面の人に対してはあまり自己開示を行なわないという共通した特徴がみられた。これは、榎本 (1997) とも一致した結果であり、心理的に距離の近い者に対するほど自己開示しやすいということがわかる。

また、未熟群において、親友に対する自己開示得点が、統合群や「個」優位群、「関係性」優位群と同等に高くなっていた。このことから、未熟群は、自己開示の対象が親友ならば、統合群と同様に高い自己開示を行なうことができ、対人関係の全てが未熟というわけではないことが示された。

アイデンティティの型と親密度と性の交互作用は有意であった (Figure1)。しかし、男性におけるアイデンティティの型と親密度の交互作用は有意ではなかった。また、女性におけるアイデンティティの型と親密度の交互作用も有意ではなかった。Stokes et al. (1980) や Chen (1995), Goodwin (1995) の結果から男女差があると予測されたが、本研究では性差はみられなかった。榎本 (1997) は、Stokes et al. (1980) や Chen (1995), Goodwin (1995) の結果を、伝統的な男性的役割に含まれる自己主張や冒険心が見知らぬ人やちょっとした知り合いに対する自己開示を促進し、伝統的な女性的役割に含まれる感情表出性や親密な関係を楽しむ能力が親しい人に対する自己開示を促進すると指摘している。近年ではそうした性役割に対する意識が薄れているために、男女差がみられなかったのではないかと考えられる。

しかし、顔見知り程度の人を自己開示の対象としたとき、統合群において男女で自己開示に有意差がみられた。女性が男性よりも自己開示得点が高かった。また、初対面の人を自己開示の対象としたとき、統合群において男女で有意差がみられた。女性が男性よりも自己開示得点が高かった。さらに、顔見知り程度の人を自己開示の対象としたとき、統合群の女性は、未熟群の女性よりも有意に得点が高かった。また、初対面の人を自己開示の対象としたとき、統合群の女性は、「個」優位群の女性、「関係性」優位群の女性、未熟群の女性、それぞれに比べて有意に自己開示得点が高かった。

これらのことから、統合群の女性は統合群の男性や他群の女性と比べて、顔見知り程度の人や初対面の人に対してより自己開示を行なうことが明らかになった。統合群は、「個」の側面も「関係性」の側面もバランスよく成熟した群であり、幅広い他者との関係を



求め、親密な関係を築くことができるという特徴をもっている。したがって、統合群の女性は他群の女性に比べて、顔見知り程度の人や初対面の人に対してもより自己開示を行なったと考えられる。

また、顔見知り程度の人や初対面の人に対して、統合群の女性が統合群の男性よりも自己開示をよく行なったことは、自己開示することに対する認知の仕方の違いが影響しているのではないかと考えられる。Petronio & Martin (1986) は、自己に対する情報が明確化される、受け手との間の親密さや信頼感が増す、お互いの関係に対する満足感が増す、相手から受容されている感じが増すなど、自己開示することによる肯定的な結果の予測に関しては男性より女性の方が得点が高く、傷つきやすくなる、弱みを見せることになる、不快になる、拒否される恐れがあるなど、自己開示することによる否定的な結果の予測に関しては女性より男性の方が得点が高いことを見出している。したがって、自己開示することによる肯定的な結果の予測をしている統合群の女性の方が、統合群の男性より有意に自己開示を行なったと考えられる。また、本研究と Petronio & Martin (1986) の研究を比較してみると、統合群において男女差がみられたことから、Petronio & Martin (1986) の結果は特に統合群の男女において顕著にみられる傾向と考えられる。

以上のことから、統合群の男性は幅広い他者との関係を求めるという「個」の側面も、親密な関係を築くことができるという「関係性」の側面もバランスよく成熟していて、かつ自己開示することによる否定的な結果の予測をしている群であるといえる。したがって、統合群の男性は統合群の女性に比べてあまり自己開示を行わなかったと考えられる。また、統合群の女性は、幅広い他者との関係を求めるという「個」の側面も、親密な関係を築くことができるという「関係性」の側面もバランスよく成熟していて、かつ自己開示することによる肯定的な結果の予測をしている群であるといえる。このような統合群の女性であるからこそ、顔見知り程度の人や初対面の人に対してもある程度の自己開示を行なうことができると考えられる。これは、統合群の女性が、顔見知り程度の人や初対面の人との間においても親密な関係を築くことができるということを示唆していると考えられる。

#### 引用文献

安藤清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能  
東京女子大学紀要論集, 36, 167-199.

- Chen, G. M. (1995). Differences in self-disclosure patterns among Americans versus Chinese. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 26, 84-91.
- 榎本博明 (1991). 自己開示と自我同一性地位の関係について 中京大学教養論叢, 32, 187-199.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. Madison, CT: International University Press.
- 小此木啓吾 (訳編) (1978). 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房
- Goodwin, R. (1995). The privatization of the personal? I : Intimate disclosure in modern-day Russia. *Journal of Social & Personal Relationships*, 12, 121-131.
- 三上聡美・山口裕幸 (2008). 親密度の異なる友人に対する自己開示抵抗感に関する検討 九州大学心理学研究, 9, 75-81.
- 岡本祐子 (編) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. (1973). Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 211-219.
- Petronio, S., & Martin, J. N. (1986). Ramifications of revealing private information: A gender gap. *Journal of Clinical Psychology*, 42, 3, 499-506.
- Stokes, J., Fuehrer, A., & Childs, L. (1980). Gender differences in self-disclosure to various target persons. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 192-198.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 山田みき・岡本祐子 (2007). 「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティと対人関係上の困難との関連 広島大学心理学研究, 7, 159-171.
- 山田みき・岡本祐子 (2008a). 「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成 広島大学心理学研究, 8, 89-98.
- 山田みき・岡本祐子 (2008b). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析 発達心理学研究, 19, 108-120.